

道徳性の発達に関する研究 (5)

——「調査的面接法」を通して——

佐藤 公代

(教育心理学教室)

(平成13年5月24日受理)

Study on the Moral Development (5)

Kimiyo SATOU

(問題と目的)

佐藤 (1999, 2000, 2000, 2001) は、「道徳性の発達に関する研究 (1, 2, 3, 4)」において、イ「同じ事件でも文章の違いによって印象は変わり、その本人に対する道徳判断も多少なりとも違っている。」ロ「青年期は、コールバークの発達段階において、4段階に属する者が多い。」ハ「情動的共感性と道徳判断の発達には、何らかの関連がある。」ニ「想像回答は、文章の違いによって変わりうる」ことなどを見出した。

今回は、道徳判断と道徳行為の間の発達の関係を「調査的面接法」で実証しようとした。

「調査的面接法」とは、稲田 (2000) の言うように、「研究仮説の検証あるいは仮説の生成を目的とし、調査者が与える質問への応答を通して、被調査者の意見や思考に関する質的データ、量的データを得ようとする研究方法である。」「調査的面接法」は「調査者が、直接に被調査者と言語を中心とした相互作用をする。」ので「深い人間理解ができる。」「被調査者の心内過程を直接明かにできる。」「手続きの柔軟さがあり、被調査者にとって自然で制約が少ない。」という特徴をもっていると言われている。

仮説は次の通りである。

- (1) 幼児、小学校低学年の子どもは、動機論よりも 結果論で道徳判断するだろう。逆に、小学校中、高学年は、結果論よりも動機論で道徳判断するだろう。
- (2) 道徳判断と道徳行為との間にずれが起こるだろう。
- (3) 「結果論、動機論の道徳判断」から児童期の「発達の節」が説明できるであろう。
- (4) 稲田 (2000) の言う「調査的面接法」の効用と限界が見いだせるだろう。

(方 法)

- 1) 期日：2000年11月28, 30日, 12月5日
- 2) 被験者：幼児, 小学校1-6年生 総計119名 (男幼児3名, 1年女児3名, 2年男児2名, 2年女児1名, 3年女児1名, 4年男児3名, 4年女児1名, 5年男児1名, 6年男児4名)
- 3) 手続き：「調査的面接法」とする。マックラッケンの「発話データの真実らしさの評価基準」(不必要な曖昧さがない。経済的である。相互一貫性がある。外的一貫性がある。統一性がある。説明力がある。生産性がある。)に準ずることとする。
- 4) 課題：ストーリー1-3 (ストーリー2, 3は転移問題である。
ストーリー1：小学校6年生のはなこさんは, お母さんのお手伝いをしていて, コップ10個割ってしまいました。小学校1年生のまさるくんは, いたずらをして, コップ1個割ってしまいました。
ストーリー2：小学校5年生のさとしくんはサッカーの練習をしているとき, ひろしくんの足を蹴ってしまい, ひろしくんの足の骨が折れてしまいました。小学校4年生のつとむくんは, まさこさんの足をわざと蹴って, まさこさんはかすり傷を負ってしまいました。
ストーリー3：小学校2年生のいちろうくんは給食の時間, ランチルームにおかずを一生懸命運んでいて, 間違っておかずをたくさんこぼしてしまいました。小学校1年生のやすしくんは, ふざけておかずを配っていて, おかずを少しだけこぼしてしまいました。

実験者の岩崎幸永氏は子どもの会話をテープにとり, それをほりおこして反応を分析し, 「発話データの真実らしさの評価基準」にてらして, 筆者と質的に考察した。

愛媛県のN小学校(僻地2級), 保育園を選んだ理由として, 岩崎氏が, 応用実習で, 子ども達と面識があり, 面接としてはやりやすかったという点からである。

実験に要した平均時間は, 幼児, 低学年は約30分, 中学年は約20分, 高学年は約30分である。幼児, 低学年, 中学年は質問に答えるだけであるが, 高学年は質問に答える以外に自分の考えがあって, 自分の考えをいろいろ言うために時間がかかったのである。

(結果と考察)

表1に各年齢, 各課題における子どもの反応を示す。

表1から仮説(1)のように, 幼児, 小学校低学年の子どもは動機論よりも結果論で判断し, 逆に, 小学校中, 高学年は, 結果論よりも動機論で判断している。ただし, 「骨折とかすり傷」のジレンマ問題においては, 葛藤場面が生まれ, 判断に苦しんでいる。課題の性質によって, 判断に違いが見られた。よって, 仮説(1)は課題の制約という条件付けで支持された。これは, ピアジェ批判になるのかもしれない。

仮説(2)については, 長期の行動観察が必要であり, 今回は実証がむずかしかった。

仮説(3)については, 表1から, 幼児, 低学年~中学年~高学年の加齢と共に, 被験者の

表1 各 Story における子どもの反応

	Story 1	Story 2	Story 3
幼児 1	(応答なし)	実施せず	実施せず
2	悪い。		
3	10個割った悪い。 いたずらやけん。		
低学年 1	わざとじゃないから、悪くない。	わざと悪い。	わざと悪い。
2	わざと悪い。	足が折れるひどい。	一生懸命仕方ない。
3	いたずら悪い。	足折るのはひどい。	わざと悪い。
4	いたずら悪い。	わざと悪い。	わざと悪い。
5	10個割る方悪い。	怒る。	ふざけては許さない。
6	わざと悪い。	わざと悪い。	わざと悪い。
中学年 1	いたずら悪い。	どちらも悪い。	わざと悪い。
2	いたずらの方悪い。	骨折はひどい。	(一生懸命は)仕方ない。
3	いたずら悪い。	(応答なし)	わざと悪い。
4	まさるの方悪い。	(応答なし)	(応答なし)
5	はなこの方えらい。	わざと悪い。	わざと悪い。
高学年 1	わざと悪い。	どちらも悪い。	わざと悪い。
2	お手伝いの方良い。	わざと悪い。	わざと悪い。
3	いたずら悪い。	(応答なし)	(応答なし)
4	お手伝いの方。	(応答なし)	わざと悪い。
5	お手伝いなら仕方ない。	わざと悪い。	わざと悪い。

(注) 表中の数字はトランスクリプトの被験者番号と一致する。

コミュニケーションに明らかな違いが見出された。つまり、低学年の「時空間の系列化」「成長の価値の自覚」、中学年の「抽象的思考のはじまり」「自立意識の芽生え」、高学年の「変数操作のはじまり」「自立への確信」の発達における3つの質的転換期を実証した。よって、仮説(3)は支持された。

男女差については顕著な事例は見いだせなかった。

仮説(4)について、稲田(2000)の言うように、効用は、イ、「仮説検証的研究」に利用できた。ロ、「被験者の理解や文脈に応じた柔軟な対応」ができた。ハ、「被験者の内面を豊かな形でとらえる」ことができた。限界は、イ、「言語に依存するため、領域や対象が限られた。」ロ、「言語報告には客観的な保証がない。」ハ、「面接者の意識や態度、質問形式が回答内容を方向づける危険性がある。」ニ、「面接の設定やデータ分析に煩雑さがある。」ということが実証された。

(結 論)

- 1) 幼児、小学校低学年は「動機論的道德判断」よりも「結果論的道德判断」をし、逆に、小学校中、高学年は「結果論的道德判断」よりも「動機論的道德判断」をする。ただし、課題によっては、特にジレンマ問題においては、どの年齢でも、「動機論的道德判断」よりも「結果論的道德判断」をしている。

- 2) 「結果論、動機論の道徳判断」から、子どもの発達の間が見られた。つまり、低学年の「時空間の系列化」「成長の価値の自覚」、中学年の「抽象的思考のはじまり」「自立意識の芽生え」、高学年の「変数操作のはじまり」「自立への確信」の発達における3つの質的転換期の一部を実証した。
- 3) 「調査的面接法」の効用と限界の一部を見出した。

(引用文献)

- 稲田博一 2000 8章 調査的面接法の概観 保坂亨他編著 心理学マニュアル面接法 北大路書房 P.92 -P.104
- McCracken, G. 1988 The long interview. Qualitative Research Methods Series Vol.13. Newbury Park, CA: SAGE.
- 佐藤公代 1999 道徳性の発達に関する研究(1) -文章の違いによる大学生の道徳判断について- 愛媛大学教育学部紀要 第1部 教育科学 第46巻 第1号 19-24
- 佐藤公代 2000 道徳性の発達に関する研究(2) 愛媛大学教育学部紀要 第1部 教育科学 第47巻 第1号 33-40
- 佐藤公代 2000 道徳性の発達に関する研究(3) 愛媛大学教育学部紀要 第1部 教育科学 第47巻 第1号 41-45
- 佐藤公代 2001 道徳性の発達に関する研究(4) 愛媛大学教育学部紀要 第1部 教育科学 第48巻 第1号 11-13

(注)

実験者の岩崎幸永氏と「調査的面接法」に参加して下さいました子ども達に御礼申し上げます。